

創建

そうこん 特集「道」

2004・1・13 VOL.38 NO.2 (通巻112号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

「あっ、ここだ！」

実は、ほんの1時間前に観た一枚の絵によく似た空間イメージの場所に遭遇し、驚いたのである。その絵は、塙町コミュニティプラザ内の「はなわ漫画廊」に展示してある作品で、ユニークな画風で知られる漫画家富永一朗氏の作品の一つだ。氏の代表的キャラクターであるチンコロ姐ちゃんが、リンドウの花にまたがり、色づいた里山の空を絹雲のように軽やかに、そして爽やかな表情で翔ている。ここに展示してある作品は、すべて色鉛筆のみで彩色し、やわらかな色調で描かれているが、その中でも特にこの絵は、「木のまち・はなわ」の温かい雰囲気表現され、そして何よりも、山と空の空間構成が何ともいえず“好ましい”と感じた作品なのだ。

何故、その“好ましい”と感じた絵とその場所が似ている、すなわち、“好ましい”場所と感じたのか。高くもなく低くもないゆるやかな山にほどよく囲まれた、何故かほっとする空間なのである。後で、町役場からもらった25,000分の1の地形図で、その場所の空間のまとまりの度合いについて調べてみた。その場所は、久慈川沿いの塙の市街地から東へ一山超えた、南北約6km、東西1.2～2km程度の、里山風景の美しい閉ざされた空間。その中を阿武隈山系を水源とする渡瀬川と川上川が流れ合流。また、縦走する県道高萩・塙線が、川と何度かスクランブルしながら地形に逆らわないで造られている。その県道から東西のスカイラインとなる尾根までの距離、並びに県道と尾根の標高差を図上計測し、算出したD/H比(仰角)は、6前後の値に集中。この値は、P.D.スプラインレゲンによる「閉鎖性の下限」で、“高くもなく低くもなく”と感じた値。また、県道から尾根までの距離は、700m前後が多く、最長でも1,300m、これまた「人を識別し得る限界距離」(4000ft)に近い値に収まっており、いいかえれば、尾根の木々の一本一本を識別できる距離でもあり、“何故かほっとする”と感

じた理由と解り、自分なりに一応納得。

ところで、塙町コミュニティプラザは、他に駅舎と図書館を合築した全国でも珍しい複合施設。JR水郡線、磐城塙駅のホームに沿って連なる“森林(もり)”をイメージし、円錐と四角錐という独特の形態の屋根を重ね合わせ、ずらしながら連続させたユニークな建物。この施設から役所に至るメインストリートが、駅前広場整備、シンボルロード整備、パティオ型商業施設整備(フォレストファイブ)などにより一新。その成果もあり、国道118号線からもランドマークとして捉えることができ、ユニークな形態に惹き付けられて訪れる客が多いとのこと。さすが、福島県建築文化賞正賞をはじめ、東北

『チンコロ姐ちゃんが 翔る里山』

土方吉雄

建築賞、通産省(当時)のグッドデザイン賞、ブルネル賞奨励賞など、数々の賞を受賞している施設。

ちなみに、ブルネル賞とは、鉄道関連のすべての分野において、最近完成、あるいは改良された優秀な建築やデザインの成果について顕彰し、公共機関の経営陣や地方公共団体の目を「良いデザインは、良いビジネスである」という事実に向けさせることを目的として設置された、世界で唯一の鉄道デザイン国際コンペティション。なんと、2001年度には、景観問題で有名な京都駅ビルも受賞!

プラザには、完成して間もなく、一度訪れていたが、何しろ10年近くにもなるので、新鮮な気持ちで観賞。ところが、駅の待合室に入って愕然。雰囲気が10年前とあまり違わない。雑然としているのだ(後で当時の写真と今回撮影した画像を比べて、解つ

たことは、ディスカバージャパンの馬鹿でかいポスターや貼り紙が、打ち放しコンクリート壁を覆い尽くすようになってしまったこと)。さらに、トイレは、落書きだらけ。プラットホームに出てみると、うらぶれた折りたたみイス、傍らには吸い殻のいっぱいになった吸い殻入れ、所在なく壁に立てかけてある薄汚れた塵取と箒…。

気を取り直して、プラザへ。漫画廊を鑑賞し、絵はがきを購入するついでに店員さんに「利用していて、何か困っていることはないですか」と尋ねる。開口一番、「冬はとにかく寒いんですよ」。確かに、まだ11月だというのに、膝掛けをしている。天井が高い上に、空調設備が良くないとのこと。

画廊の上にある喫茶コーナーで軽食。座席からは、吹き抜け部分より下の画廊の作品が眺められ、演出された空間が好ましい。メニューを見てまた愕然。メニューの右下に

“厨房はモーター類の音が反響して聞きづらくご迷惑をおかけします。”

とはいえ、この2階からは、農家の茅葺き屋根の屋根裏空間に見られる、垂木のリズムと構造材が生み出す緊張感を現在の技術と感覚で表現したという構造的特徴を間近に見ることができる。しかし、小屋束の根元の貼り紙にまたまた愕然。

“Information

館内は建築上、声が反響しますのでご注意ください!

1Fは、まんが画廊となっております。

1Fコミ☆プラ”
どうも、喫茶コーナーの利用客は、女子高生が多く、その談笑が1階の管理者にとっては、騒音公害に等しいとのこと。それで、2階の喫茶コーナーの客に対する“1Fコミ☆プラ”からのInformationということになったらしい。

とはいえ、このInformationは、私にとって思わぬ知識の入手となった。このように巻頭言のネタになったのだから…。

(助教授)

ネットワーク OB & OG ⑪



建築家への道

中尾 実

建築を学ぶ学生誰もが思う事として、提出した設計課題が採点される時の判断基準はどういうものなのかと言う思いがある。私は、かなり強くその事への疑問を持ちながら学生時代を過ごした記憶がある。与えられた設計条件（機能）を可能な限り満たす事であるには違いないのであるが、建築の場合は満たすべき機能以外に、デザインという要素が大きく関わってくるからだ。もちろん機能だけを考えても奥が深く、建前上はそれが近代建築の証でもある訳だ...が。現実を見渡せば、一部の団地に建つ集合住宅等を除いて、同じデザインの建物など存在し得ないほど多様である。「どんなデザインをすれば評価が得られるのだろうか？」こんな学生時代の強い疑問が、私の建築への1つの出発点になっている。建築デザインにおける客観性、共通感覚なるものがあるのか...？

私は20代の4年間を丹下健三都市建築設計研究所で仕事をし、12万㎡に及ぶシンガポールのショッピングセンター兼ホテルのキングスセンター（実施設計迄で着工に至らず）を初め、シンガポール・インドアスタジアム、横浜美術館、広島国際会議場、ポローニャ・フィエラ地区センタービル、その他の設計に携わった。規模が大きく、デザインに対する意識の高さについては非常に良い勉強になった。しかし、代々木の体育館に憧れていた丹下事務所は、巨大なプロジェクトで繁栄を極めてはいたものの、建築界の第1線からは後退していた。現代思想の潮流は構造主義からポスト構造主義、ポストモダニズムへ、建築界もモダニズムからポストモダニズムに変

プロフィール

1958年生まれ

1978年3月 日本大学東北工業高等学校卒業

1981年3月 日本大学工学部建築学科卒業

1983年4月～1987年1月 丹下健三都市建築設計研究所

1987年2月～2003年7月 アーキテクトファイブ勤務

2003年8月 ナオアトリエ設立

■丹下健三都市建築設計研究所で携わったプロジェクト

- ・キングス・センタープロジェクト
(シンガポール/未完/模型がSD8309に掲載)
- ・ポローニャ・フィエラ地区センタービル
(イタリア/新建築86年2月号掲載)
- ・横浜美術館
(横浜市西区みなとみらい/新建築89年7月号掲載)
- ・広島国際会議場 (広島市中区/新建築89年7月号掲載)
- ・シンガポール・インドアスタジアム (シンガポール)

わっており、東京都庁が「ポストモダニズムに出口はない」と批判していた本人のデザインであることは、その後物議を醸し出した時代である。

東京都庁のコンペがとれた時期に、丹下事務所を退社し、丹下事務所と一緒に仕事していた先輩4人が設立したアーキテクトファイブに、最初のスタッフとして仕事の場を変えた。丹下事務所では建物の規模が大きすぎる事から、1人で建物全体をまとめる機会が巡ってこないと思われたからである。その後アーキテクトファイブで16年の長期にわたって設計に従事する事になる。その時、私が携わった2つの作品をここで紹介したい。両方とも社内コンペで私の案がベースになっている建物である。

G-CLEF（写真1、2参照）は洞爺湖を一望できる山の頂に建つリゾートホテルに併設されたウエディングチャペルである。螺旋状のプランがそのまま壁として立ち上がり、その壁を手作業でパイプレーションをかけたステンレス材で覆った。その名の通りト音記号がベースとなっている彫刻的建築である。

IRONY SPACE（写真3、4、5）は、いつも一緒に仕事している梅沢建築構造研究所の社屋である。構造事務所として最もシンプルと思える「構造だけで建築を成立させる」と言う強固なコンセプトを掲げながら進めた建物である為、インテリアに於いても床はフローリング張りになっているものの、壁、天



写真1 G-CLEF 外観（新建築 03年4月号）



写真2 同左



写真3 IRONY SPACE 北側外観

■アーキテクトファイトで携わったプロジェクト

- ・小川美術館 (東京都千代田区／新建築87年10月号掲載)
- ・LINK/dB-SOFT s・BUG本社研究所
(札幌市／新建築88年12月号掲載)
- ・モエレ沼公園全体計画 (札幌市東区)
- ・三戸町役場・三戸町保険センター
(新建築96年6月号、建築資料集成掲載)
- ・ソニーミュージックエンターテインメント白金台オフィス
(目黒区／新建築98年8月号掲載)
- ・モエレ沼公園ガラスのピラミッド
(札幌市東区／新建築03年9月号掲載)
- ・G-CLEF
(北海道虻田町／ウエディングチャペル／新建築03年4月号掲載)
- ・桜美林学園プラネット淵野辺キャンパス
(神奈川県相模原市／新建築03年6月号掲載)
- ・IRONY SPACE (東京都世田谷区／新建築03年5月号掲載)

井は鉄の構造材に塗装しただけになっている。厚さ100mmのデッキプレートを4.5mm厚の鉄板で両側からサンドイッチし、断熱材を充填した床、壁、屋根とも同じ断面のパネルを工場で制作し、現場に搬入し、全て溶接で組み立てている。外部に面する鉄板にはコルテン鋼を使用しているため、そのままでも耐候性が確保されている。

スケルトン・インフィルと言う手法が目目されているが、スケルトンだけで建築を成立させ、使用している材種も少なく鉄が主であることから、サスティナビリティ性の高い建築と言うことも出来る。そして住宅規模でこれほど存在感のある建築は、世界中探してもほとんど見つけることが出来ないと自負している。

近年地球規模での環境問題が社会の大きなテーマになって来ており、ある程度の規模の建物になると、緑化を中心に、空調効率、使用材料等施主と共に“環境”と言う視点で建築を考えることが増えて来ている。そう言う意味で我々の果たすべき役割も少なくなく、新たな建築を決定する一つの要素になり得ると考えている。さらにエネルギー、サスティナビリティ、エコロジー、ユニバーサルデザイン、ゲニウスロキ、アメニティ等、ある意味では当たり前と言えキーワードが目目されて来



写真7

IRONY SPACE北側外観。建物右側の外装部分はコルテン鋼そのままの素材(赤茶色)、左側塔状の黒い部分はコルテン鋼に赤さびの発生を抑えて安定錆を発生されるRSコート塗装で約12年後には全体が一色に、さびたチャコールブラウンになるとのこと。

おり、建築を根源から考え直す非常に良い機会が、我々に与えられていると考えている。

ただ、それ以前に重要な事は、虚構とも感じられる現代社会の中で、コミュニティ、家族、個人に対し、いかにリアリティのあるデザインを提案出来るかと言う事である。そして、その時にデザイン能力が問われ、学生時代の疑問に少し答える事になると思っている。先に紹介した二つの建物は、規模的な点で社会問題を大きく背負わされている訳では無いと思うが、IRONY SPACEは、建築界に一つの提案が出来たと思っている。新建築03年5月号に掲載されているが、是非実物を見て批評して頂きたい。

マクルーハンの言葉に「テクノロジーにしっかりと直面できるのは、五感の知覚を事態の変化に応じさせることに習熟した真の芸術家である。」と言う言葉があり、芸術家を建築家と読み替え、抽象的ではあるが一つのヒントになると思っている。さらに「思索の人として行動し、行動の人として思索しなければならぬ」と言う格言を旨に、パワーとユーモアを持って、スローに歩いて行きたいと考えている。

(ナカオアトリエ代表)

写真4 IRONY SPACE
内部吹き抜け、階段

写真5 IRONY SPACE 吹き抜け天井見上げ

写真6 階段から吹き抜け越し
に執務空間を見る

私の履歴書③

産学連携への道

大学院 非常勤講師 湯本 長 伯 (九州大学教授)



このたびは創建に寄稿させて戴き、大変喜んでおります。講師を務める工学部を始め、桜門の皆さんの直向きには、いつも嬉しい想いをしており、またこの「創建」を編集されている若井教授の色々な思いにも、日頃より大いに共感しているからです。

さて私は略歴にもある通り、れっきとした？「建築」出身でありながら、現在の仕事は国立大学として「産学連携」を中心的に推進することである。これは一見、全く関係ないように見えるのだが、実は「デザイン」と「アーキテクチャ」という点では、ダイレクトに繋がっているのであり、更に言えば「産学連携は建築分野の新しい職場」とさえ言える。つまり、モノはいつまでも無限に作ることは出来ないし、スクラップアンドビルドも限界だが、事業創造と言われる事や業を作り出すことは、21世紀にも相変わらず歓迎なのである。

(次の仕事を探しているゼネコンさん、聞いて下さい)

この「産学連携」を一言で言うと、「異種融合・事業創造」と要約できる。異種異質なものが出会い融合する中で、全く新しい事や業(ワザ)や仕事が生れて来ることを、意図的意識的そして組織的に行うことである。多くのものが集まり散じる都や東西文化の融合装置としてのシルクロードなど、古今東西多くの例を挙げることが出来る。具体の主体は「産学官公民金」そして「海外」の各セクターに在り、互いに異種異質で与え合うものが大きければ、実は産学連携であっても産々・学々連携であっても、一向に構わないのである。実際、口をきいたことがないという斜め隣の研究室との連携が、最も有効であったなどという(笑えない)話もあるのである。

私は永田町という東京の中心地で育ったが、この永田町から見えたものが、人生にかなり影響を与えている。60年安保では学校の周囲全てがデモ隊で埋め尽くされ、国を動かす様々な力というものを考え、団塊の世代としてその初めから関わった全国模擬試験では、ほぼいつも一番であった。全国で一番とは自分のクラスで一番ということに等しく、圧倒的な情報量の差が、そうさせてしまうのである。それでもたまたま一番でないこともあり、お陰で「どのようなことがあっても必ず一番にな

る法」というものを、10歳過ぎで知ってしまった。こういう経験を通じて、私は勉強の意味ということ随分考えさせられたし、学んだことを生かして社会貢献すること、子供の頃にずいぶん意識した。恵まれた場所で恵まれた境遇であれば、自分のことより社会に貢献すべきであるというのは、ある意味で幼い自負かも知れないが、しかしそういう状況で自己利益のみを追求するのでは、余りに美しくないと言わねばならないだろう。

その具体的なプロセスが、社会連携・産学連携であり、その原理が異種融合・事業創造なのである。

さてデザイン&アーキテクチャと先に述べたが、デザインとは「未だこの世に無いものの姿をあらかじめ描くこと」と定義出来るし、アーキテクチャとは「要素を集め巧みに組合わせて高次の働きを引き出すこと」である。この2つが出来る人材は限られており、まさに「産学連携」は建築分野の新しい職場とも言えるのである。

私は永田町から発し、ほぼ8都県(いわゆる首都圏)で暮らして来たが、一念発起して九州大学に向かった。違った位置から日本を見てみたかったからである。日本の中心からしか見えないものもあるが、その対極からしか見えないものもある。その両方が見えると、世界も見えて来るのである。地方では、ただ建築を設計出来れば良いという訳には行かない。「補助金」をかき集め、「様々な必要を組合わせて建物のリクワイアメントを形成」し、それを例えば「美術館」という概念の中に押し込み、それでも限られた予算を遣り繰りしないと、決して建築は出来ない。モノの設計・デザインの前に、延々と事(コト)のデザイン、プロジェクトデザインがあって初めて、モノを作ることが出来る。その厳しさに比べれば、建築設計など実に単純で容易なこととも言えるのである。

そうした作業を敷衍して、私は地域デザインと言う。その中には、地方の人が安心してそこに住み続けられる産業デザインもなくてはならないし、鉄道や上下水道などのインフラも含まれる。そうしたことにきちんと根を張ってから、空間・環境デザインへと進む必要があるのである。本当の“生活環境デザイン”は地域デザインでなくてはならないし、誰だって住宅デザインの前に安心して住める“生活デザイン”をするだろう。建物は出来ても本人が夜逃げをしていたら、計画も設計もない。

「博士への道」 シリーズ No.4

博士論文：視・聴覚障害者の利用を考慮した建築計画に関する研究
授与校：日本大学

教授 佐藤 平



私は日本大学卒業後国家公務員として文部省に入省した。入省後まもなく先輩の関澤先生（当時助手）から私の卒業論文を日本建築学会に投稿しないかと連絡があった。

その時の私の卒業論文は今日のバリアフリーデザインの原点となる「障害児者施設の建築計画に関する研究」であった。そして発表者は関澤先生と専任講師の小谷先生、そして私の3名連記で3編投稿し、発表者はそれぞれの論文の筆頭者が発表するという事にした。その研究発表終了後の事であった。東京大学 吉武泰水 教授から私の都合が良い日に一度研究室に遊びに来ませんかと言うお誘いがあった。場所は取り敢えず東京大学の吉武研究室か、建築会館でと言う事であった。勿論私はお伺いさせていただきますと返事をさせて頂いた。その数日後約束の建築会館に先生を訪ねると、先生はすでに建築会館応接室で待っておられ、そして唐突に私の大学（東京大学）で先日発表した研究を、継続的に研究して見ませんかと言うお話であった。私にとっては夢のような話すぐ承諾すべきだったが、勤務先の事を考えると簡単に即答もできず後日ご返事させて頂きまずとお答えし帰宅した。その後役所の上司に相談しどころ、役所の上司には、吉武先生の教え子は勿論先生の先輩も多く、勤務時間に支障なければ差し使えないと言う返事であった。

それからしばらく過ぎてからのことであった。先生から明日私の家に来ませんかのお誘いであった。勿論私は喜んでお伺いしますと返事させて頂いた。

そのお伺いした時のお話は、改めて私の研究テーマと研究方法等のお話であった。それからは先生のご好意に甘え、先生のご都合の良い日にお宅か東京大学にお伺いし、論文の指導をしていただく事になった。当時の先生の研究室には数多くの院生や研究生がいて賑やかで楽しい雰囲気だった。そのため研究室の仲間と日本建築学会を含む関連学会に数多くの口答発表論文を投稿するようになった。論文のタイトルも「盲・聾・養護学校の研究」から「戦後のRC造校舎の研究」さらに「公民館建築の研究」等と広がった。

なお主たる論文は学位取得の為の審査論文として、「身障者の住めるまちづくり」「その1」から「その3」までの3報をリハ協会学術論文集「総合リハビリテーション」に投稿した。（このリハ協会投稿の論文は高い評価を受け、リハ協会より常陸宮殿下・妃殿下ご臨席の席に私ども夫婦が招かれ高木賞を頂いた。なお受賞式後は御進講もさせて頂いた。）この論文3報は、引き続き

学位論文として一冊に纏め東京大学に学位論文として提出する予定でもあった。しかし私が高木賞を受賞後まもなくの事であった。突然吉武先生から連絡があり至急学位論文を持参する様にとの事であった。急いで論文を研究室に持参したところ、先生からまだ東大定年前ですが、事情があって東京大学を退官し、筑波大学の副学長して就任する事になりました。そのためこれまでの論文を纏めず学位申請の手続きをして下さいと言う事であった。なお私の後任の教授は専門が違うので論文を受理してくれるかどうかわかりません。そこで間に合わなかった場合は、君の学位論文は日大の木下先生が受理して下さいになっていきますとの事であった。結局私の論文提出は期限迄に間に合わず、日本大学理工学部の木下教授（後の日本大学総長）に学位審査をお願いする事になった。しかし木下先生からは、これまでの論文と別に新たに日本建築学会論文報告集に3編投稿し、論文が掲載されてから検討させてほしいとの事であった。

そこで私は改めて日本建築学会の学術論文集に「視・聴覚障害者の利用を考慮した建築計画に関する研究」（その1）から（その3）迄の3報を連続投稿し、論文集に掲載された。論文掲載後間もなくの事であった。理工学部から学位審査請求書類を提出して下さいとの連絡があった。勿論学位論文のテーマは学会論文と同じ「視・聴覚障害者の利用を考慮した建築計画に関する研究」として下さいとの連絡だった。学位論文の主な内容は1章・障害者と都市環境、2章・視覚障害者向け住宅の配置計画、3章・聴覚障害者と住宅の配置計画、4章で視覚障害者の利用する住宅環境のチェックリストである。

学位論文を提出し、発表も終了し、しばらく過ぎてからであった。大学本部から私の自宅に学位授与式が昭和52年3月28日と決まりました。当日、日本大学本部に来て下さいとの連絡であった。私の学位取得は私の不徳の致す所決して楽ではなかった。勿論学位取得の一番の早道は大学院博士課程に入学し、最終学年迄に学位論文を提出する事である。しかし私のように社会人となつてからの学位申請も可能である。もし将来学位を取得したければ、それぞれが所属する主たる学会に審査論文を何本か投稿し、博士課程のある、大学に学位申請するのが良い。多少の違いがあってもどこの大学も受理条件は同じだと思う。ぜひ諸君も頑張って主たる学会に論文を投稿し、何編か採択されたら学位論文として纏め学位審査可能な大学に申請するのが良い。勿論現在は日本大学工学部も大学院博士課程が設置されているので審査可能である。私もこれまで学外出身者を含め何人かに学位を出してきた。諸君も頑張って博士課程に進学し学位論文を提出するか、又は主たる学会に審査論文を何本か投稿し、それが受理されたら是非当学部に学位申請してほしい。

学 術 論 文

注：届出があった論文

- 宮本勇一, 大濱嘉彦, 立松英信, 「亜硝酸型ハイドロカルマイト混入ポリマーセメントモルタルの性質に及ぼす配合要因の影響」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 23, No. 2, June 2003, Vol. 25, No. 1, pp. 863-868.
- 森 一平, 大濱嘉彦, 崔 洛運, 「ホットプレス成形法によるもみ殻-廃発泡ポリスチレン複合体の物理的性質に及ぼす配合要因の影響」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 25, No. 1, June 2003, pp. 1469-1474.
- N. W. Choi and Y. Ohama, “Durability of New Polymer Mortar Using Waste Expanded Polystyrene Solution”, Proceedings of the 7th International Symposium on Brittle Matrix Composites (BMC 7), Woodhead Publishing Limited and Zturek Research-Scientific Institute, Warsaw, Poland, Oct. 2003, pp. 486-494.
- Y. Ohama and S. Takahashi, “Effects of Accelerated Curing Conditions on Strength Properties of Epoxy-Modified Mortars without Hardener”, Proceedings of the 7th International Symposium on Brittle Matrix Composites (BMC 7) Woodhead Publishing Limited and Zturek Research-Scientific Institute, Warsaw, Poland, Oct. 2003, pp. 533-541.
- M. U. K. Afridi, Y. Ohama, K. Demura and M.Z. Iqbal, “Development of Polymer Films by the Coalescence of Polymer Particles in Powdered and Aqueous Polymer-Modified Mortars”, Cement and Concrete Research, Vol. 33, No. 11, Nov. 2003, pp. 1715-1721.

第46回日本大学工学部学術研究報告会 (建築部会)

日時：平成15年12月20日

特別講演

- 「ISO 14001取得に伴う雨水の再資源化システムの開発」 出村 克宣
- (計画・環境系)
- ・障害者のためのスポーツ施設に関する研究
 - －屋内体育施設に対する障害者の意識と障害者への配慮の現状－
- ・ミュージアム施設における障害者の利用状況に関する研究
 - －遊園地、テーマパークにおける利用状況把握と問題点について－
- ・ひとにやさしいまちづくりに関する研究
 - －電動車イス障がい者の生活の背景と日常生活行動におけるまちづくりの課題 その2－
- ・ひとにやさしいまちづくりに関する研究
 - －郡山市開成山公園における便所の現状調査と問題点について－
- ・老人保健施設の空間構成に関する研究
 - －機能訓練スペースにおける実態把握と問題点について その2－
- ・老人保健施設の空間構成に関する研究
 - －レクリエーションの実態と問題点について－
- ・住民参加のまちづくりに関する研究
 - －須賀川市南部地区における住民参加のまちづくりについて－
- ・中心市街地活性化に関する研究
 - －須賀川市南部地区商店街景観形成事業におけるケーススタディー
- ・代替医療としての1300度燃焼“炭”に関する研究
 - 吉開 紀男 (炭住宅環境総合研究所) 木村 準
 - 村山 嘉延 尾股 定夫 佐藤 信 坂戸 純也
- ・学校ピオトップ導入における子供達の屋外空間イメージ変化について
 - －学校教育施設における環境学習空間に関する研究 (その2)－
- ・限定空間内の着座行動に関する人間工学的検討
 - －前後座席間の通過歩行動作と新幹線自由席の着座特性について－
- ・室内構成要素としての身体尺度に関する研究
 - －その2 デジタルデータベース構築のための手法 (試案)－
- ・高層化された単位制高等学校の学習環境についての一考察
 - 武田 康 若井 正一 若林 克友
- ・木造住宅のリフォームに関する実態調査報告
 - －施工者側からみた水まわりリフォームの業務について－
- ・量販店におけるレジカウンターの業務実態に関する検討
 - 時崎 裕子 若井 正一 嶋崎 雄一
- ・建物の外装色が地域社会に与える影響に関する検討
 - －高輝度黄色系を外装色とした店舗の事例について－
- ・就寝まわりの生活実態に関する検討
 - －起居様態と就寝の履歴について－
- ・既存戸建住宅団地の更新整備のあり方に関する調査研究
 - －住宅の更新整備と居住者の住み替え意識について－

- ・屋外の音の伝搬性状に与える風の影響
 - 佐藤 壘 濱田 幸雄
- ・郡山駅西口駅前広場における歩行者の行動特性の実態
 - 土田 真一 土方 吉雄 三浦 金作
- ・環境共生住宅市街地モデル事業の実態について
 - 新関 智尋 土方 吉雄 三浦 金作
- ・街路空間における探索歩行時の注視に関する研究
 - －脳波の電位変化について－
- ・街並み構成材料の地域特性に関する調査研究
 - 三浦 金作 土方 吉雄 ○新鞍 俊介
 - －その8 東日本の12都市とロンドン市内5地区の比較－
- ・街並み構成材料の地域特性に関する調査研究
 - 土方 吉雄 岩崎 博 田綿 隆文
 - －その9 地区別外壁材料色差評価方法の提案－
- (構造・材料系)
- ・廃発泡ポリスチレン溶液を用いたポリマーモルタルの基礎的性質に及ぼす開始剤及び促進剤の影響
 - 大濱 嘉彦 諸岡 淳史
- ・廃発泡ポリスチレン溶液を用いた水中打込みポリマーモルタルの基礎的性質
 - 大濱 嘉彦 ○諸岡 淳史
- ・亜硝酸型ハイドロカルマイト混入ポリマーセメントモルタルの接着性
 - 大濱 嘉彦 宮本 勇一 ○貝 本官
- ・亜硝酸型ハイドロカルマイト混入ポリマーセメントモルタルの防せいに及ぼす下地の塩化物イオン量の影響
 - 大濱 嘉彦 ○宮本 勇一
- ・高性能減水剤を用いた繊維補強高耐水性セッコウ硬化体の曲げ性状
 - 大濱 嘉彦 ○宇秋 哲也
- ・再乳化成粉末樹脂混入ポリマーセメントモルタルの性質に及ぼす細骨材の種類の影響
 - 大濱 嘉彦 ○松本 真吾
- ・ホットプレス成形法によるもみ殻-廃発泡ポリスチレン複合体の性質に及ぼす成形条件の影響
 - 大濱 嘉彦 ○森 一平
- ・細長い平面形を有する建物の多点常時微動測定
 - －上下動の検討－
- ・骨組部材の振りに関する基礎的研究
 - 大岡美紗恵 倉田 光春 千葉 正裕
 - 浅里 和茂 日比野 巧
- ・骨組部材の幾何学的非線形解析に関する基礎的研究
 - 大野 敦史 倉田 光春 野内 英治
- ・単層ラチスドーム解析に関する基礎的研究
 - 宗形 亮 倉田 光春 野内 英治
- ・サステナブル・コンストラクションに関する基礎的研究
 - 内藤 正純 倉田 光春 野内 英治
- ・福島県地域の強震記録K-NETと常時微動記録の比較とその特性に関する研究
 - 斉田 達也 倉田 光春 野内 英治
- ・中間層免震建物の応答特性に関する研究
 - 押田 渉 倉田 光春 野内 英治
- ・住空間の最適化
 - －住宅設計システムの基礎的研究－
- ・高強度材料を用いたRC造柱・梁接合部に関する実験的研究
 - 小田切広和 倉田 光春 野内 英治
- ・高強度材料を用いたRC造柱・梁接合部に関する実験的研究
 - 秋山 和仁 Sanjay Pareek 黒田 浩司

■トピック①:

木材活用コンクールで受賞

本学科研究生の若林克友君(若井研)は、日本木材青壮年団体連合会主催の第6回木材活用コンクールに「森のたより」(木造構築物・下記写真)を応募し、会長賞(アディア賞)を受賞した。今回の応募作品は、木造建築物(住宅など)の実施作品が多い中から、厳正な審査のもとに選考された。なお、受賞作品の「森のたより」は、本学部の正門脇にあった森の木を活用して本学部東側グラウンドの中央モニュメントとして木匠塾のメンバーを中心に本学科の有志学生により共同制作されたものである。表彰式は、平成15年5月24日に奈良県で開催された同連合会の全国大会の席上挙行された。



■トピック②:

本学科OBが博士学位取得

本学科第18回卒業生の川崎三十四氏(現、第一工業大学教授)は、平成15年3月、日本大学より博士(工学)の学位を取得された。論文題目は、「表面温度の異なる建築材料の接触温熱感の評価方法に関する研究」。

■**土方助教**は、(独)土木学会より、コンクリート委員会表面保護工法研究小委員会委員を委嘱された。

■**出村教授**は、(独)日本コンクリート工学協会より、コンクリート技士研修委員会委員を委嘱された。

■**岩崎教授**は、7月11日、東京大学工学部11号館で「土壁のタバコ煙吸着一放散特性」について講演された。

■**土方助教**は、8月21日、船引町より船引町中心市街地活性化庁内検討委員会の指導講師を依頼された。

■**土方助教**は、8月22日、会津西部ライブセンター整備事業、PFI導入可能性調査企画提案書審査委員を委嘱された。

■**土方助教**は、8月25日、船引町商工会より船引町タウンマネジメント構想検討委員会の指導講師を依頼された。

■**土方助教**は、9月1日、福島県より福島県建築審査会委員・会長代理に再任された。

■**出村教授**は、9月6日から9月14日まで、日本大学大学院グローバル・ビジネス研究科が経済産業省大

学連携推進室より受託した起業家育成プログラム等導入促進事業による「MOTプログラムのための教材開発」に係わる資料収集・調査のため、アメリカのウォートンビジネススクール、ペンシルベニア大学工学部MOT学科、カリフォルニア工科大学インダストリアル・リレーションズ・センターを訪問すると共に、9月11日及び12日の両日にわたり、カリフォルニア工科大学技術移転オフィスにおいて、「効果的な技術移転プログラム」セミナーを受講し、無事帰国した。

■**大濱教授**は、9月7日から12日にポルトガルのリスボン市で開催された、RILEM(国際材料構造試験研究機関連合)年次総会に、National Representative(日本代表)、Bureau Member(理事)、Technical Activities Committee委員及びTechnical Committee-TDP委員長として出席された。

■**若井教授**は、9月12日に日本建築学会東北支部主催の東北建築賞審査会委員長に選任された。

■**大濱教授**は、9月15日から17日にブルガリアのソフィア市で開催された、ブルガリア科学アカデミー主催

of Accelerated Curing Conditions on Strength Properties of Epoxy-Modified Mortars without Hardener」と題する論文を発表された。

■**出村教授**は、10月23日、郡山にて開催された平成15年度東北地区工業再配置促進連絡協議会(東北6県の市町村で構成される)研修会に講師として招かれ、「建築材料開発と産学官連携について」と題して講演した。

■**土方助教**は、10月30日に開催された平成15年度東北都市景観協議会の基調講演として、「景観とまちづくり」と題して講演した。

■**石井崇治君**(4年、土方研)は、11月1日、(独)日本建築家協会(JIA)東北支部主催の「第7回JIA東北建築学生賞」において奨励賞を受賞した。

■**土方助教**は、11月5日、埴町より中心市街地活性化基本計画策定委員会委員を委嘱され、委員長に選出された。

■**大濱教授**は、11月5日に岡山県備前市で開催された、岡山セラミック研究センター主催の「第4回先端研究スタートアップ支援事業に伴う勉強会」に出席し、「硬化剤無添加エポキシ樹脂混入ポリマーセメント系複合体の開発」と題して講演された。

■**出村教授**は、11月7日、本学で開催された第4回産・学・官連携フォーラムのパネルディスカッション(テーマ:より魅力的な産学官連携の輪づくり)においてパネリストを務めた。

■**若井教授**は、11月8~9日開催の日本インテリア学会全国大会(於、東北芸術工科大学)の実行委員会副委員長を委嘱された。

■**大濱教授**は、11月13日に東京で開催された、(独)日本建築学会主催の「第1回コンクリート・ポリマー複合体シンポジウム 環境に配慮したコンクリート・ポリマー複合体の使い方とその技術の現状」に出席し、「コンクリート・ポリマー複合体とは」及び「コンクリート・ポリマー複合体の材料、製造・施工方法及び用途」と題して講演された。

■**大濱教授**は、11月17日に建築研究開発コンソーシアム(会長、独立行政法人建築研究所理事長)から、「ポリマーセメントモルタルによる耐震補強法研究会」の副委員長を委嘱された。

■**岩崎教授**が研究を進めている土壁の健康面への優れた特性に関し、11月22日(土)午後5時30分よりフジTVスーパーニュースで紹介された。

■**土方助教**は、12月7日、福島県景観アドバイザー派遣事業により、梁川町川北まちづくり・みちづくり景観整備基本計画策定及びワークショップのアドバイザーを依頼された。

教室ニュース

の10th International Conference on Mechanics and Technology of Composite Materialsに出席し、

“Recent Research and Development in Sustainable Use of Concrete-Polymer Composites in Japan”と題する論文を発表された。

■**若井教授**は、9月20日に郡山地域テクノポリス推進機構よりユニバーサルデザインのものづくり研究委員会の委員長を委嘱された。

■**大濱教授**は、セメント&コンクリート(2003年10月号、No.678)に、「廃棄物の再資源化技術 ポリマーセメントコンクリート及びポリマーコンクリートへの活用の可能性」と題して投稿された。

■**土方助教**は、10月9日、郡山商工会議所より郡山くらしのみちゾーン社会実験実行委員会委員を委嘱された。

■**大濱教授**は、10月13日から15日にポーランドのワルシャワ市で開催された、ポーランド科学アカデミー主催の7th International Symposium on Brittle Matrix Composites(BMC7)に出席し、“Durability of New Polymer Mortar Using Waste Expanded Polystyrene Solution”及び“Effects